V2 消失をめぐる一考察

A Study around the loss of V2

阿部　幸一†
Koichi ABE

Abstract：V2 (Verb-Second) is considered to be typical for German Languages. Even though English belongs to the German family, Present-day English does not show V2 anymore. However, Old/Early Middle English used to show V2. Therefore, many scholars tried to explain why English lost V2. In this study, we propose the different approach from the consideration of the change in the information structure.

1. はじめに

英語が V2（動詞第二位置）を消失したとされる時期に関しては、Kemenade (1987)では 1400 年頃に起こったと仮定されているが、Haeberli (2002)の指摘では、1350 -1500 年の 33 の文献の内、28 の文献で、非演算子に関わる主語と動詞の倒置（通常の V2）が半分以下になり、15 世紀までには V2 のパターンがマイナーのものになったとしている。但し、Bækken (1998)のように、V2 が初期中英語期でも残っていたと主張している学者もいる。従って、時期的には幾分開きはあるものの、V2 が消失したのは、おおよそ中英語期の 1400 年から 1500 年の間頃に起こった仮定される。

次に英語で V2 消失が起こった要因としては、例えば Hulk & Kemenade (1995)では、(1)に見られるような接語の存在がなくなったことが、その要因としている。

(1) Æfter his gebede **he** ahof þæt cild up …
after his prayer he lifted the child up
(van Kemenade(1987:110-111))

しかし、Haeberli (2002)が指摘するように、単に接語が消失して、完全名詞主語と同じ扱いを受けるならば、共に V2 が消失する環境(XP—{NP_{Subj}/Pro_{Subj}}-V) の可能性ばかりでなく、その逆に共に V2 が維持される環境 (XP-V-{NP_{Subj}/Pro_{Subj}}) の可能性もあるので、単に接語が消失することだけでは、V2 が消失するとは言い切れないと考えられる。

次に Haeberli (2002)では、不定詞の語尾の-n が消失して、一人称と区別できなくなり、そのことにより empty expletive が認可されなくなり、empty expletive に位置的に依存していた V2 も消失したという、いわば形態的な消失の連鎖として、V2 の消失を捉えている。

(2)

	OE	Early ME	Late ME
Inf.	-an	-en	-e
1sg	-e	-e	-e
2sg	-st	-st	-st
3sg	-þ	-þ	-þ

Haeberli の説明では、形態的な消失による連鎖的な要因が、統語的な V2 消失の要因としているが、それだけでは直接的な要因にはなりえないと思われる。

また Kroch, Taylor & Ringe (2000)及び Trips (2002)では、北部中英語期における、OE の特徴であった接語が来ると V2 を破る現象が、この方言で見られないのは、この時期におけるスカンジナビア人との言語接触による影響が大であるとしている。

(3) a. 北部方言：Topic - V - NP_{Subj} (V2)
Topic - V - Pro_{Subj} (V2)
b. 南部方言：Topic - V - NP_{Subj} (V2)
Topic - Pro_{Subj} - V (V3)

ところが、Miyashita (2004)が指摘するように、後期中

† 愛知工業大学　基礎教育センター　（豊田市）

英語期における南部方言になると、V2 が消失する。但し、北部方言では相当する文献が不在である。

(4) 後期中英語期南部方言(Late ME)：

Topic - {NP_{Subj}/Pro_{Subj}} - V (V3)

もし英語がそのままスカンジナビア語の影響を受けていたら、V2 の強い言語になったはずであるが、実際は逆の方向である V2 消失に至るので、その限りでは、これは北部中英語期における一時的な現象のように思われ、V2 消失についての決定的な要因とは考えられない。

以上のように、従来考えられてきた様々な V2 消失の要因は、まだ完全な説明になっていない。

ただ言語接触という立場からすると、8～10 世紀に北部中英語期に及ぼしたスカンジナビア語の影響よりも、11～14, 5 世紀に英国全土に及ぼしたノルマン・フレンチの影響の方が大のはずである。中尾(1972)の指摘によると、英語におけるスカンジナビア語からの借用語が、they を含むせいぜい数百語位なのに対し、ノルマン・フレンチからの借用語は、pork, beef を含むおおよそ一万語位と記述される。

形態的変化としては、屈折語尾の水平化が見られる。これは主に名詞、形容詞に関係し、「格」・「性」は衰退し、「数」だけが残った。定冠詞についても、単数・複数共に「格」・「性」を問わず、þe/the に統一されて行く。一方、動詞に関しては、人称、時制、法を表す屈折接辞が単純化され、OE で強変化していたものが、弱変化になった。これらすべては、英語における仏語との言語接触による、単純化／水平化と関係していると仮定される。しかし統語レベルでは、形容詞の後置用法 [1] と、否定の累積表現 [2] くらいに留まる。

以上のことから、ME 期におけるノルマン・フレンチの統語的影響は、あまり多くないと仮定される。それはなぜか。

これについては、Kroch (1989)の指摘を参考にする。彼によると、ノルマン・フレンチの時代に、本国のフランスにおいて、Old French の伝統であった empty subject が、Middle French になって消失し、また代名詞主語と完全名詞主語の位置的な区別がなくなり、V2 も消失したとしている。この指摘が正しいとすると、北部中英語期の場合と異なり、言語接触を与えるノルマン・フレンチ自体が V2 を消失しかけていたので、英語もその影響を受けたと言えそうである。[3]

また Haeberli (2002)の指摘によると、英語は OE 期すでに、主語と動詞の倒置がなくなり始めていたとしている。これらの指摘が正しいとすると、英語はノルマン・フレンチの影響よりも以前に、V2 を消失する用意ができていたと考えるべきである。この限りでは言語接触による説明は正しくないことになる。もし言語接触があったとしても、英語そのものが V2 消失しようとしているのに対し、その影響を与えるべきノルマン・フレンチも V2 を消失しようとしていたので、英語は V2 消失し易い環境にあったと言えるのではないか。

従って英語の V2 消失が、言語接触というような「外圧」ではなく、OE にその萌芽が見られるような、言わば「内圧」によると仮定される。その内的要因は何であったか。これらを中心に考察したいと思う。

2. 提案

まず、我々の案を提出する前に、V2 消失に関する別の考えとして、Platzack (1995)を取り上げる。そこでは、V2 消失の要因として次のように仮定されている。言語には文の定性 (Definiteness) を示す定性素性 [+F] があり、それは時制 (tense) や法 (mood) によって実現される。V2 言語の場合には、C^0 に [+F] があるので、[+F]を語彙的に実現するために、C^0 に動詞が移動して V2 が起こる。OE においては同様の操作をしていたが、ME に[+F] が I^0 (=T^0) に移ったことにより、V2 が起こらなくなるとしている。この説明では、なぜ定性素性が C^0 から I^0 に移動したか明確でないことと、Platzack の説明では、英語が単に CP-V2 から IP-V2 になったというだけで、どうして V2 が消失したかという説明になっていない。但し、英語において何らかの内部特性の変化が起こって、V2 が消失したという説明としては、魅力を感じる。

そこで、V2 構造とは一体どういうものなのか、もう一度考える必要がある。

Hopper & Traugott (2003:144-5)によると、接語や V2 を持つ言語の特徴として、『第二位置の傾向は、話された文が典型的に持つ topic-comment structure (話題・評言構造) であり、多くの発話においては、始めの句 (話題) が、それについて言われるもの (評言) に対して、あたかも set the stage for (お膳立て) をしている。』としている。

従って、英語における V2 をめぐる本当の変化は、V2 と

いう「話題・評言」構造から、主語の台頭に伴う「主語・述語」構造への変化であると考えられる。「主語・述語」構造を要求する原理とは、取りも直さずEPPと仮定される。

もしEPPが節(TP)は主語を要求する原理であるとすれば、V2は話題化を要求する原理が働いているのではないかと仮定される。この詳しい原理を導入する前に、機能範疇について考える必要がある。そこで最近の機能範疇に関する進化論的議論を見てみよう。

最近の研究では言語発達の観点から、語彙範疇と機能範疇の関係について捉えなおそうという考えが見られる。Osawa (2009)は、言語の機能範疇の通時的発達と、子供の言語習得に関わる機能範疇の発達が類似しているという仮定から、子供の文法と同様に、言語の初期の段階では、語彙範疇しか存在せず、言語がより発達するに連れて、機能範疇が導入されるという厳密な進化論的な仮定をしている。

一方、Y. Hosaka (2009)は、ドイツ語はCPとTPがまだ分化していない形のFPを仮定している。またM.Hosaka (2009)では、(Osawa(2009)の仮説に反し) OEの段階で既に埋め込み節でCPがあった可能性を示唆している。以上三者の論文に見られるように、機能範疇の進化論的仮説と言っても必ずしも共通の認識がある訳ではない。

但し、Cinque (1999)のように、どの言語にも一律的に同じだけの機能範疇があると仮定する理論よりも、経済性の原理からすると優れているように思われる。つまり、どの言語も同じだけの機能範疇を仮定することは、ある言語では実現されない不要な機能範疇までも仮定することになるので、言語の経済性の観点からすれば、不要な機能範疇は仮定する必要はないはずである。これは、極小主義の精神にも合致する。

したがって、ここではOsawa (2009)らの機能範疇に関わる進化論的な理論を完全に受け入れる訳ではないが、少なくともTPの範疇に関しては、共時的および通時的に見て、存在しない可能性がある。そこで、次の例を見てみよう。

(5) a. þess vegna hafa ekki verið **margin nemendur** hér
therefore have not been many students here
'therefore many students have not been here'
(Wurmbrand (2004:14))

b. and swas miclum sniwde swelce micel flys feolle
and Ø so heavily snowed as if much fleece fell
'and it snowed so heavily, as if a lot of fleece were falling'
(Hulk & Kemenade (1995:244))

(5a)はアイスランド語からの例で、主語がVP内に留まっているもの。(5b)はOEからの例で、非人称の主語が顕在的に現れる必要がないこと示す。もしTPが顕在的に主語を要求する機能範疇とすれば、いずれの例もTPを必要としないように思われる。

そこで、ここではY. Hosaka (2009)の考えをOEに採用する。彼の考えによると、現代ドイツ語においては、言わばCPとTPを兼ねるFPがあり、それがV2に関わっていると仮定される。

(6) $[_{FP}$ Spec $_{F'}$ [F VP]]
(Y.Hosaka (2009:469))

すると同じくゲルマン語系に属し、V2を示しているOEは、現代ドイツ語におけるのと同じように、CPとTPを兼ねるFPがあり、まだこの段階では、TPは発達していなかったと仮定することができる。

またHulk & Kemenade (1995)の主張によると、主格の主語が義務的になる、つまりChomsky (1981)のEPPに相当するものが表出するのは、15世紀初期と仮定されているので、ここでの考えに基づけば、ME後期にTPが導入されたと仮定される。したがって、ここにおける機能範疇の部分的な進化論的な仮定としては、OEにはTPはなく、ME後期になってTPが導入されたという仮定に立って論じることができる。

するとOE / ME初期の構造と、ME後期以降の構造の違いは次のように示される。

(7) i) OE / ME初期 (V2を示す) :
話題・評言構造: [FP XP [F V] …
ii) ME後期以降 (V2消失、TPが台頭) :
主語・述語構造: ([CP) [TP NP [T V] …

主節に関しては、CPは不要なので、この構造の違いは、話題・評言構造では、指定辞位置(Spec, FP)に話題化要素が来て、その主要部(F)に動詞が来るのに対し、主語・述語構造では、指定辞位置(Spec, TP)に主語が来て、その主要部(T)に(助)動詞が来るという平行性が見られる。英語における変化は、その指定辞位置に来るものが、話題化要素から主語に限定されることと、主要部に来るものが、(近代英語期に入ると)動詞から助動詞(＝過去現在動詞)

に限定されることである。その意味では、共により限定化された項目への変化と言える。

もう一つの大きな違いは、OE の FP が、TP の機能範疇の出現によって、その役目を終えて消失することである。この FP の消失が V2 の消失に関与すると仮定する。すなわち、FP は、V2 を引き起こす話題化要素を要求する原理を持っていたと仮定する。その原理を EPP に倣って、TPP (Topic Prominence Priciple)と呼ぶことにする。

(8) TPP: 「主節（ルート節）の FP は、話題化要素を必要とする」

ここで、TPP が適用する範囲をルート節に限定したのは、V2 が埋め込み節では起こらないことと、bridge verb の場合には V2 が起こるからである。(9)はドイツ語からの例である。

(9) a. Ich weiß nicht, was du gesehen **hast**
I know not what you seen had

b. Watson behauptete, dieses Geld **hatte** Moriarty gestohlen
Watson claimed this money had Moriarty stolen

(Vikner (1994:133))

(9a)において、埋め込み節で V2 が起こらないのは、埋め込み節が主節の動詞の補部となっていることから、埋め込み節全体がいわば旧情報を持つと仮定される。よって埋め込み節の中で、新情報（topic）を示す V2 とは両立しないと考えられる。一方、bridge verb の場合には、主節と埋め込み節との橋渡し動詞として、主節にはほとんど情報はなく、埋め込み節に新情報があると仮定されるため、V2 と両立すると仮定される。ここで、FP の指定辞に移動される話題化要素は[+topic]を持つと仮定し、それを認可するために動詞は FP の主要部に移動すると仮定する。

英語の場合には、OE ではドイツ語と同じ V2 を持ちながら、ME 後期に V2 が消失するのは、次のように仮定する。OE には、ドイツ語と同様に、話題化要素を要求する FP があるため、動詞は FP の主要部へ移動し、V2 を示す。しかし、ME 後期に入り、TP が導入されるのに伴い、CP と TP を兼ねていた FP は役目を終える。FP が役目を終えると共に、それが持っていた TPP も役目を終え、もはや V2 が生じなくなる。例を示すと次のようになる。

(10) a. OE

[$_{FP}$ On twan þinggum$_{[+topic]i}$ **hæfde**$_j$ [$_{VP}$ God t_j þæs mannes sawle gegodod t_i]]
with two things had God the man's soul endowed

'with two things God had endowed man's soul'

(AHTh, I.20, Kemenade(1987:42))

b. ME 後期

[$_{TP}$ Thare-fore Ihesu$_i$ **es**$_j$ [$_{VP}$ t_i t_j noghte funden in reches
therefore Jesus is not found in riches

'therefore Jesus is not found in riches'

(Richard Rollem, 5,8, Kemenade(1987:182))

(10a)の例では、TPP の要請により話題化の要素は、FP の指定辞位置に生じ、それが持つ[+topic]素性を照合するために、動詞が主要部位置に移動すると仮定する。但し、現代英語でも話題化構文は存在するが、OE で見られたような倒置はおこらないので、V2 をめぐる TPP の原理には関与しないと仮定される。

(10b)の例では、V2 を要求する FP がないので、もはや主語と動詞の倒置は起こらないが、TP の指定辞位置に主語が来るため、ME 後期においては、それが持つ主格を動詞が照合するため TP の主要部に移動する。しかし、英語はその後 do-support や法助動詞の台頭により、動詞は顕在的移動しなくなる。

我々のここでの説明が Platzack の説明より優れている点は、V2 の消失が英語における機能範疇の変化と連動して起こると仮定しているところと、加えて TPP がルート節に限定されるために、埋め込み節では V2 が起こらないことが説明できるからである。

3. まとめ

この研究では、V2 消失という英語史上重要な問題を、従来なされている様々な説明とは別の観点である、情報構造の変化という観点から考察した。TPP というようなあまり統語的でない仮説を導入することに関しては、純粋の統語論者からは批判を浴びるかもしれないが、ここではあまり論じなかった接語との類似性を考えると、こういった考察も可能のように思われる。

（注）

1）現代英語においても形容詞の後置用法が残っているが、前置用法とは意味的な相違が見られる。例えば、前置用法の the *invisible* star が恒常的な読みを持つのに対し、後置用法の the star *invisible* は一時的な読みを持つ。

2）中英語に見られる次のような否定語の二重表現は、12 世紀から 15 世紀に見られる一時的な現象であり、中島・児馬(1990)の観察（例参照）におけるように、否定文の循環的なプロセス（いわゆる Jespersen’s cycle）を経て、現代英語では否定辞は助動詞の後で起こる。

(i) thou ne knowest nat what is the eende of thynges?
you not know not what is the end of things
‘you don’t know what the end of the things is?’
(CH Bo I pr6 48-9)

3）言語接触という観点から考えると、日本語の場合にも、遣隋使・遣唐使の時代、中国から漢字を含め多くの言葉が輸入された時に言語接触があったと仮定される。語彙的にはかなりの語が借入され、漢字という新たな文字まで導入されたにも関わらず、統語的には日本語の文構造 SOV は、中国語の文構造 SVO の影響を受けていない。これは英語の場合と異なり、日本語の場合には、言葉を輸入したのは大人達で、彼らはすでに日本語の文法を身につけていたと思われる。それが日本語と英語の言語接触の違いと考えられる。

主要参考文献

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.

Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*, Oxford University Press, Oxford.

Haeberli, Eric (2002) “Inflectional morphology and the loss of V2 in English,” In Lightfooot, D ed. *Syntactic Effects of Morphological Change*, 88-106, Oxford University Press, Oxford.

Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (1993) *Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge.

Hulk, Aafke and Ans van Kemanade (1995) “Verb second, pro-drop, functional projections and language change”, in Battye & Roberts ed. *Clause Structure and Language Change*, 227-256.

Kemenade, Ans van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.

Hosaka, Michio (2009) “The Emergence of CP,” *English Linguistics* 26, 476–496.

Hosaka, Yasuhito (2009) “Notes on Functional Categories in German,” *English Linguistics* 26, 460–475.

Miyashita, Harumasa (2004) “Cliticization in the History of English: Loss of the Subject Position Asymmetry and the Wackernagel Pronominal Object,” *Linguistic Research* 20, 103-154.

中尾俊夫(1972)「英語史 II」, 英語学体系 9, 大修館書店, 東京.

Osawa, Fuyo (2009) “The Emergence of Functional Categories in the History of English: Ontogeny and Phylogeny in Language,” *English Linguistics* 26, 411–436.

Platzack, Christer (1995) “The Loss of Verb Second in English and French,” in Battye, A. & I. Roberts, ed. *Clause Structure and Language Change*, 200-226.

Trips, Carola (2002) *From OV to VO in Early Middle English*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

(受理 平成25年3月19日)